

一期一会



山下アキ

イラストレーター。長崎市出身。活水女子短期大学日本文学科卒業。
パレットクラブスクール、安西水丸塾受講。
主に、雑誌、書籍、広告等で活動中。2017年よりANA機内誌『翼の王国』
で『宿と一日』イラストと文を連載中。
線画・点描・貼り絵で建築物や風景を取材し描くことをライフワークに
している。

イラストレーターを志し、上京して12年が経ちました。

それまでの私は長崎で生まれ、長崎で育ち、地元の短大を卒業後、地元企業に就職し、会社員としての日々を過ごしていました。絵を専門的に習ったこともなければ、美術大学にも通っていないのですが、小さい頃から漫画を描いたり、学生の頃には先生や友達の似顔絵を描いていました。絵を描く事は私の唯一の好きなことであり、褒めてもらえることでした。会社に勤めながら、趣味で絵を描き続けていましたが、次第にもっと絵について学びたいと思うようになり、東京築地にある『パレットクラブスクール』に通うため上京しました。

『パレットクラブスクール』とはイラストレーターの原田治さん^(注1)が主催するイラストレーションの学校です。そこでは、絵の描き方を一から習うというよりも、個性を生かす方法や、その人の絵の良い部分を伸ばしていくような授業内容でした。

イラストレーションというのは、ただ絵を描くということではなく、依頼者の気持ちや言葉を『伝達する』『ビジュアルライズ』する仕事であり、『プロのイラストレーター』とはどういうものかを根本的に知ることができました。第一線で活躍しているイラストレーターやデザイナーが講師であり、普段会えないような方に直接絵を見ていただき、アドバイスがもらえました。

また、同じ目標を持った仲間との出会いもとても刺激的で、励みにもなりました。そこで学ぶ人たちは、私と同じように年齢も経歴も様々で、別の仕事をもちながら通っている人が多くいました。不思議とイラストレーションがあると、人見知りだった私でも色んな人とコミュニケーションできることに気がつきました。そのことが一番の驚きであり、喜びだったかもしれません。

『パレットクラブスクール』では本当にたくさんの出会いがありました。そこでの様々なご縁がこの道に進むためのターニングポイントだったような気がします。

7年間、アシスタントを勤めた上田三根子さん^(注2)や、恩師である安西水丸さん^(注3)も『パレットクラブスクール』を通して、会うことができました。

卒業後、日中は上田三根子さんのアシスタントを勤めながら、生のイラストレーターの現場を近くで見て学び、月に一度、安西水丸さんの私塾に通いながら多くのことをご教示いただき、イラストレーターを目指す第二の人生がスタートしたのです。

イラストレーターの仕事は基本的に絵を描くことですが、フリーランスの人がほとんどで、営業、広報、事務も全て自分で行います。もちろんエージェントや会社に所属している人もいます(海外のイラストレーターはエージェント契約が必須だと言われています)。会社勤めの12年間の社会人経験は、イラストレーターになってから活かされたような気がしていて、今でも感謝しています。

私はスロースターターで、仕事を始めたのも30歳を過ぎていましたし、仕事が軌道に乗り始めたのもここ数年の話です。コツコツ絵を描き、絵がたまったら売込みに行く。最初はその繰り返しでした。私は建築物を見ることも描くことも好きで、東京都内にある好きな建築を見て歩き、たくさんの作品を描きました。それは、いつしか、私のライフワークになっていきました。

先日、世界遺産に登録された長崎の教会群にも強く惹かれ、長崎市内、外海地区、五島列島にある教会群をめぐるしました。2015年には教会をテーマに東京と長崎で個展を開き、オリジナルの冊子を作り、販売もしました。個展もひとつのPR作業で、このような活動が後々、作風(セールスポイント)になり、仕事に繋がっていくのでした。

一つの仕事をすると、それが宣伝になり、仕事を見たデザイナーさんや出版社などから声がかかるようになりました。簡単なホームページを作って、いつでも連絡が来てもいいように年中無休の気持ちで頑張っていました。イラストレーターは十人十色で営業の仕方も様々です。それがまた、難しくもあり、面白いところなのかもしれません。途切れ、途切れの仕事も少しずつ繋がっていくようになってきて、近年では全日空の機内誌『翼の王国』で全国の宿をイラストとエッセイで紹介するお仕事をいただけるようになりました。

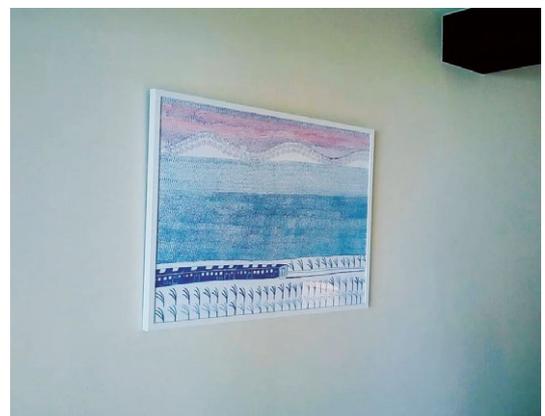
これも『パレットクラブスクール』がご縁で知り合った、画家、作家、建築家である坂口恭平さんがきっかけで、同誌で連載中の坂口さんが、個展の時に作ったオリジナルの冊子を見て、『翼の王国』の編集部にもその場で連絡をして、繋いでくださったのです。

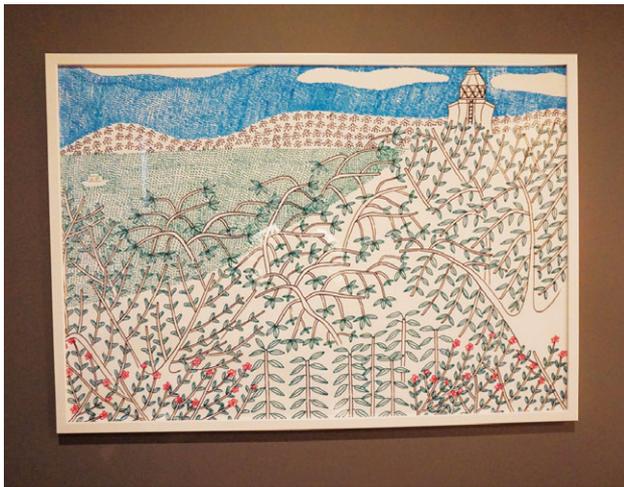
言葉では言い表せないほど驚いたし、感激したのを覚えています。ここでも、絵は人と人を結び、縁となり私にとって大きな出来事となりました。

最近では少しずつ長崎でのお仕事もいただけるようになったので、ご紹介したいと思います。

まずは、伊王島のリゾートホテル『i+Land nagasaki』でのお仕事です。今年の4月1日、やすらぎ伊王島は『i+Land nagasaki』と名前を変え、新しいエンターテインメントリゾートとしてリニューアルしました。お話が来たのはちょうど今年の初めころでした。『i+Land nagasaki』の空間設計・設計を担当されていた乃村工藝社の方が、ちょうど長崎に向かっている全日空の機内で『翼の王国』で宿のイラストエッセイを見て下さったことがきっかけでした。『宿』とプロフィールにある『長崎出身』というキーワードが印象に残ったそうです。その後、HPを見て下さり、私が長崎の絵をたくさん描きためていたことから、正式にご依頼いただきました。お仕事の内容はリニューアルオープンにあたり、客室に飾るアートを依頼したいとのことでした。全部で9点の絵をデータ入稿し、B0サイズ(1030×1456)に拡大印刷、額装されリニューアルされた客室50室に私の絵が飾られています。

更に2018年夏には、新施設や新たな宿泊エリアがオープンし、コテージ(ロッジ)エリアが新設されました。伊王島の名所である、『伊王島灯台』『伊王島大橋』『カトリック馬込教会』を新たに発注いただき、そこに飾る絵を3点、描き下ろすことになりました。今回は実際に伊王島





伊王島灯台



伊王島大橋

に行き、取材し、絵を描かせていただきました。

コテージエリアの客室34室にも新作が飾られています。

伊王島の取材を通して感じたのは自然の豊かさで、透明な海と大きな青い空でした。伊王島の再出発に少しでも関わられたことは大変ありがたく嬉しかったです。

そして、次のお仕事は、今年の7月にみらい長崎ココウォークの5階にオープンした『TSUTAYA BOOK STORE』に壁画アートを制作してきました。蔦屋の内装アートディレクターの方が、『長崎出身』ということで探されていて、HPを見てご依頼いただきました。

縦2メートル×横10メートルという、まさに『大きな壁』でした。打ち合わせをして、アートディレクターの方とクライアントのご提案で『長崎らしい風景』というテーマで描くことになりました。

私が、長崎らしい風景として思い浮かぶのは、斜面に建っている多くの家々です。斜面の家々は、夜には美しい夜景へと変わり、長崎の特徴的な風景の一つと言えるでしょう。また、長崎港から見える造船風景は長崎の人にとって、懐かしくもあり、見慣れた風景なのではないでしょうか。

そのアイデアラフを提出し、OKをいただき、『港から見える長崎港での造船風景』と、『坂の上に建つ家々』の絵を描くことにしました。

7月某日、ついにココウォークで壁に絵を描く日がやって来ました。

わたしは『大きい絵』も『壁に絵を描くこと』も実は初めて、内心緊張していました。まずは、描いてきた最終的な作品をデータ化し、壁にプロジェクターで投写して、その線をなぞる作業から入りました。

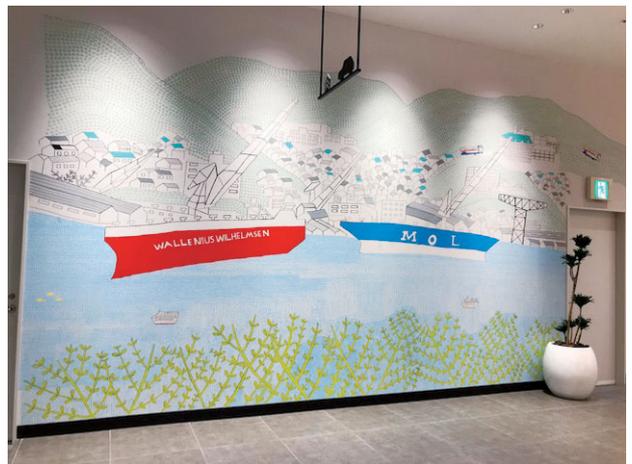
その時『TSUTAYA BOOK STORE』は、数週間後のオープンにむけて着々と準備が進められていました。私の絵を描くスペースはココウォークの施設との共用の部分で、昼間はお客様の通行があるため、ご迷惑にならないよう、プロジェクターの作業は深夜に行いました。初日は思うように進まず、猛烈に不安になりましたが、数日間の作業の末、ようやく壁に描く感触に慣れてきて、絵が見えてきました。

印象的だったのは、夜間作業とは別に、昼間の営業中に描いていると、色んな人が珍しがって声をかけて下さったことです。『ひとりで描いてるんですか?』『これ手描きなの?』など。老若男女、たくさんの方に声をかけていただき、元気をいただきました。通りすがりのカップルや小さいお子さんなど『描いてみたい!』という人には、少しだけ筆入れしてもらったり、兄には着彩のアシスタントで手伝いに来てもらい、ちょっとしたコラボレーションにもなりました。(兄は実は私より絵が上手です)

また、深夜作業の際はココウォークの閉店時間になると、ガードマンの方が点検にいらっしゃるのですが、毎回、声をかけてくださり、最終日には『これからも頑張ってくださいね!』と言って、固く握手を交わしました。

深夜に作業中の業者の方も同じように励まして下さいました。もしかしたら、もうお会いすることはできないかもしれないけれど、私の心には永遠に残る一期一会となりました。

8日間かけて制作した壁画はみなさんとの小さなやり取りが大きなパワーとなり、無事完成することができました。



そして、最後に長崎の仕事といえば、こちらの『ながさき経済』の表紙の絵を今年の1月号から担当させていただいております。

毎月、季節感があり、長崎を感じられる絵をテーマに描いているのですが、1年をとおして、長崎の年中行事やイベントを調べているので、今年は本当に長崎と寄り添っているような気がしています。長崎に住んでいた時には知らなかったことに気付いたり、確認できたり、改めて長崎の歴史や文化に触れることが出来て嬉しいです。こちらのお仕事を通して、長崎と関わらせていただけることは、本当に幸せなことだと思っております。精一杯努めさせていただきます。

これまで、イラストレーターの仕事が続けてこられたのは、いつも応援してくれている家族やご縁のあった全ての方々のおかげです。今後も感謝の気持ちを忘れず、絵を描き続けようと思っています。イラストレーターとして、まだまだ未熟な私ですが、一期一会を大切に日々精進して頑張っております。

注記

(注1)

原田治

1946年、東京都生まれ。イラストレーター。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。1970年、雑誌「アンアン」創刊号でイラストレーターとしての仕事を開始。1976年からはキャラクターグッズ「オサムグッズ」の制作を開始し、人気を博す。

1979年安西水丸・ペーター佐藤・アートディレクターの新谷雅弘らとともにユニット「パレットクラブ」を結成。その後、築地にイラストレーター養成学校「パレットクラブスクール」を設立。

主な著作に『オサムグッズスタイル』（ピエ・ブックス）、『ぼくの美術帖』（みすず書房）など。2016年11月没。

(注2)

上田三根子

埼玉県生まれ。セツ・モードセミナー在学中からイラストレーションの仕事を始める。明るい色使いと、オシャレなセンスは人気が高く、広告、雑誌、装丁、キャラクターなど、幅広い分野で活躍中。イラストレーション教室の講師、雑誌のコメンテーターなど、多方面での活動も多い。

主な仕事は、LION「キレイキレイ」のキャラクターをはじめ、SONYプレイステーション用ソフト「ぼくのなつやすみ」キャラクター、NHK「おしゃれ工房」「きょうの料理」タイトルバック。

(注3)

安西水丸

1942年生まれ。日本大学芸術学部美術学科造形卒業。電通、ADAC（NYのデザインスタジオ）、平凡社でアートディレクターを勤めた後、フリーのイラストレーター・作家になり、雑誌「宝島」「ガロ」などに連載。朝日広告賞、毎日広告賞、紀文おいしいイラスト展特選、日本グラフィック展年間作家優秀賞、キネマ旬報読者賞など受賞多数。主な著書に「アマリリス」「手のひらのトークン」「エンピツ画の風景」「荒れた海辺」「青山の青空」「アトランタの案山子・アラバマのワニ」「メランコリーララバイ」「バードの妹」「4番目の美学」「メロンが食べたい」「魚心なくとも水心」「美味しいか、恋しいか」など。2014年3月没。